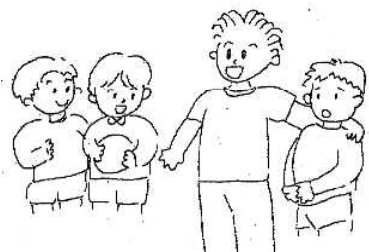


「特別支援教育」って ご存じですか？①



「子どもをじっくり見つめてみよう」

新年度が始まって、2ヶ月半が過ぎました。

ハッピーコンサートのような大きな行事をこなし、自分らしさも出せるようになってきた頃かなと思います。

この2ヶ月半のお子さんの様子を家庭からご覧になっていて、どんな感想をお持ちでしょうか？

「うん、まあまあ勉強もがんばってるし、友達とも仲良くやっているようだ。あまり心配することはないな。」

というおうちもあれば、逆に、

「朝、学校へ行くのがしんどそうだなあ。新しい学級の友達や先生になじめないのかな？

勉強が難しく困ってるのかな？」

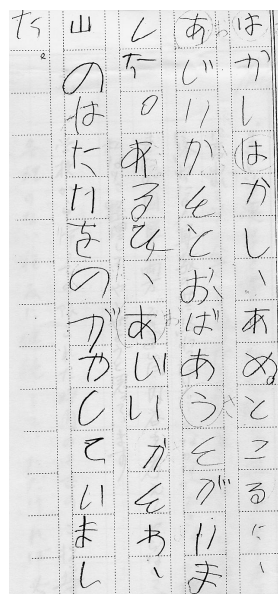
と不安を感じておられる保護者もおられるかもしれません。

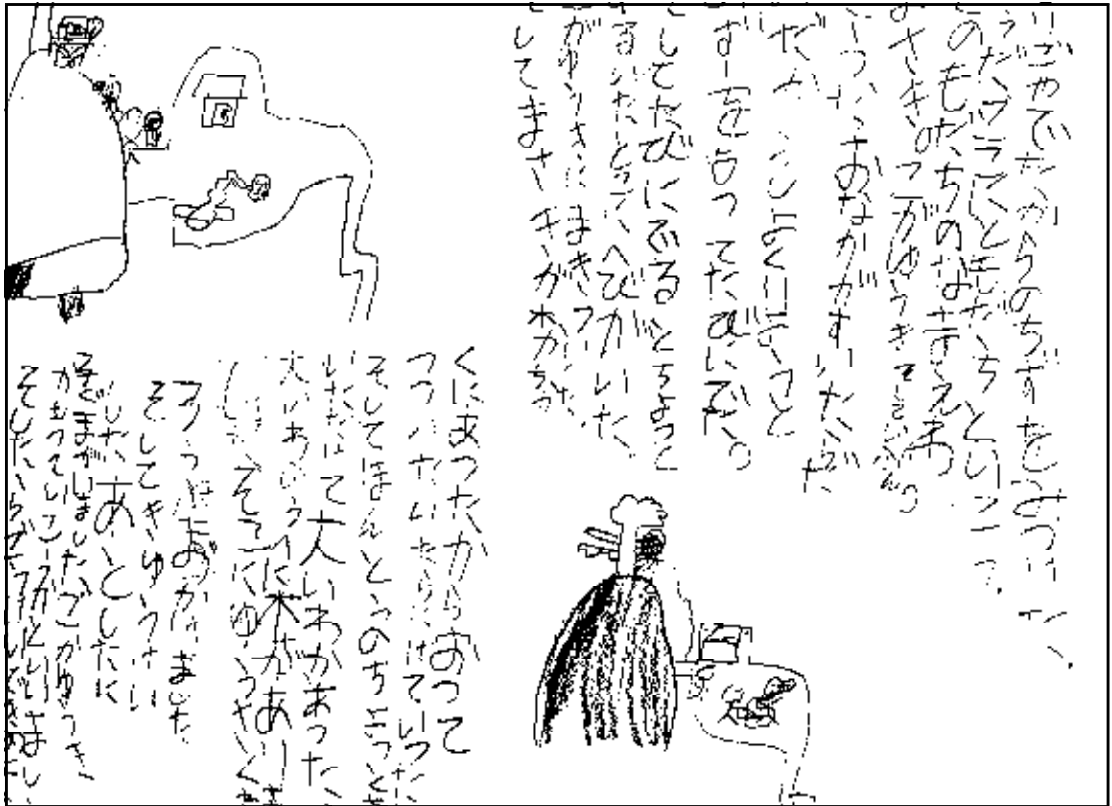
家庭とちがって、学校というところは様々な個性の子どもたちが集団で生活し、学ぶ場です。多かれ少なかれ、ルールに縛られる苦しさ、人づきあいのしんどさ、学ぶことのしんどさ等をどの子も感じながら日々を過ごしています。

一方、子どもたちも、人づきあいが苦手な子、平気な子、じっくり考えることが苦手な子、平気な子、運動能力の高い子、そうでない子、視力・聴力のよい子、弱い子等、心の面でも体の面でもいろんな「偏り」があります。

中には、その「偏り」が他の子より強いため、ずっとできるはずのことがなかなかできなかつたり、がまんできずくじけてしまつたりします。

かつて担任した子の中にこんな子がいました。その子は、朗らかで友達づきあいもよく、勉強も素直にがんばる子でした。でも、どういう訳か文字を書いたり、読んだりすることがひどく苦手で、2年生になってもひらがなの読み書きがなかなかできませんでした。心配されたお母さんが専門医に受診されたところ、「利き手利き足は右なのに、目は左利き。そのため物が大きっぱにしか見えず、字の形がうまく捉えきれない」という課題を持っていたことが分かりました。そういう課題があることが分かり、文字の勉強をうんとゆっくり丁寧に進めたところ、2年生の始めには五十音を半数読むのがやっとだったのに、3年の終わりには創作物語をぐんぐん書けるほどになりました。





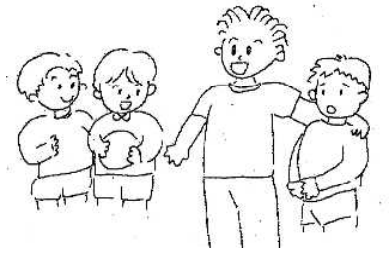
また、こんな話も聞きました。ある中学生の事例です。

英語の授業を落ち着いて受けることができず、すぐいらだって教室を出ていってしまうという生徒がいました。落ち着きのない、根気のない子だと見られていたのですが、実はその生徒は、普通の子より聴覚が過敏で、人の話し声も教室の雑音も全部一緒に聞こえてしまうため、先生の声や友達の発言をきちんと聞き取れず、学習に集中できなかったのです。そこで、静かな部屋で個別学習をさせてみたら集中して学習に取り組めたということです。

こんなふうに、何らかの発達の偏り・未熟さのために学習や人間関係に支障をきたしている子どもたちのためにきめ細かな指導の手だてを考え、取り組んでいこうとするのが「特別支援教育」です。

布引小学校は、3年前から特別支援教育についての研修と実践に取り組んでいます。特別支援教育に関する情報も、この学校便りで連載し、保護者の皆様と一緒に考え合いながら取り組みを進めていきたいと考えていますので、ご意見ご質問等お寄せください。

「特別支援教育」って ご存じですか？②



「子育ての失敗？」

子どもたちの中にはいろいろ気になる姿があります。

遊んだおもちゃがほったらかし。脱いだ服もそのまま。学校でも机の中はぐちゃぐちゃ。自分の持ち物をすぐ無くしてしまう、そんな子がいます。

いくら注意しても直らないとつい、「何回言ったら分かるの！」と声を荒げてしまいます。

「今日の〇〇の時間、どんなことをするのだろう……。」と見通しが持てないことには極端に不安になってしまう子。「松坂投手の球は1秒もかけずに投げているのに、どうして「時速」になるの？」などと、理解しにくいことにぶつかるとパニックになってしまう子。そんなふうに非常にこだわりの強い子もいます。

「細かいことは気にするな」「もう少し勉強したら分かるよ」といくら言っても聞かせても自分のこだわりから離れられません。

教師やおとなとは楽しそうによくしゃべるのに、子どもどうしの中ではおどおどしてしまい、休み時間は一人で本を読んでいることが多い、そんな子もいます。

「遊ぼうって、自分から声をかけてごらん」と言っても緊張してしまてできません。

そういう子どもの保護者の中には、「小さいときのしつけ方を間違えたのだろうか」「親や祖父母がががまいすぎて、神経質な子にさせてしまったのだろうか」などと、自分の子育てが悪かったからだと、自分を責めてしまう方も少なくないようです。

しかし、「子育て」だけが原因ではない場合もあるのです。

子どもの気になる姿に悩んでおられ、学校でも気になるお子さんについて、本校では特別支援教育コーディネーターの教師を中心に教育相談の場を設けています。

教育相談に来てくださった保護者の方の話をお聴きして、しばしば共通するのは「小さいときから、この子は子育てに苦労した。」「保育園の頃にも同じような課題があった」というような話です。

つまり、子育ての問題だけでなく、その子自身が生まれつき持っている何らかの発達のアンバランスさが原因である可能性もあるのです。

そんなとき、保護者の方の同意のもとに専門家の先生に依頼して発達の偏りを検査してもらっています。

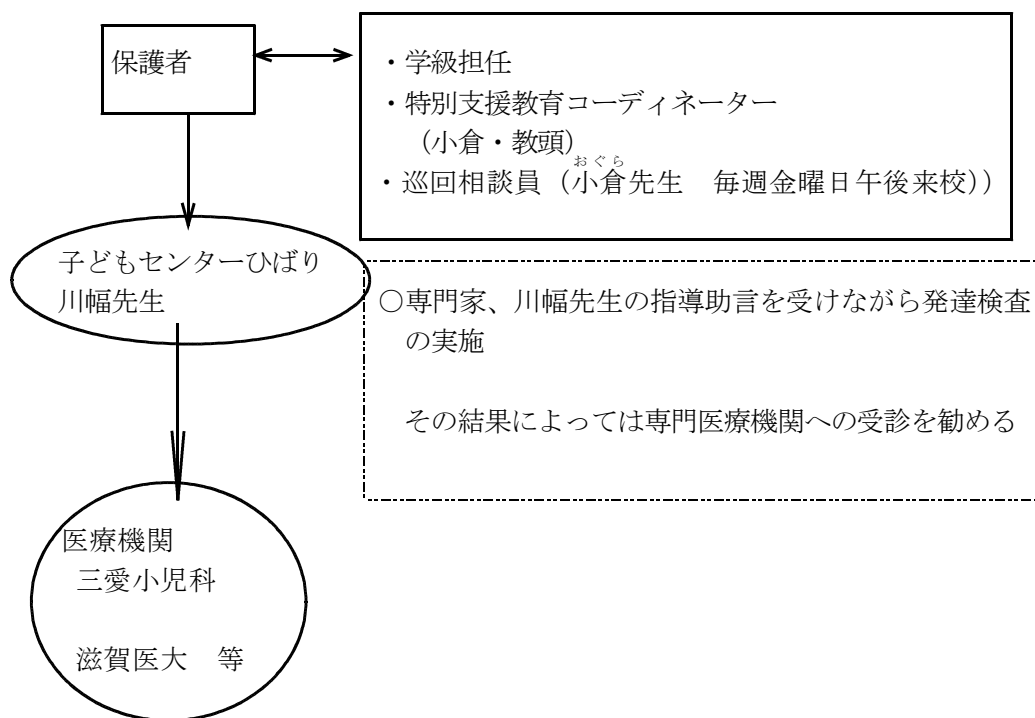
ある子は、検査の結果、発達に顕著なアンバランスさがあることが分かりました。検査結果を知ってそのお母さんは、「ずーっと今まで自分の子育てのせいだと、悩んでいたのですが、これですっきりしました。」と言われました。

そして、その子の発達上の課題を受け止めた対応を日々の生活の中でされるようになり、また学校も指導の配慮をして行く中で徐々にその子の姿がよいものになっていきました。

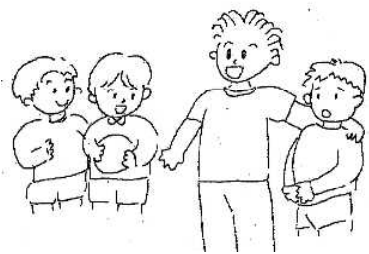
発達上の課題をもった子どもについては、その対応が早ければ早いほど変容も大きいということをお本校の取り組み事例から実感しています。

「うちの子、ちょっと気になることがあるんだけど……」とお思いの保護者の方がおられましたら、遠慮なくご相談ください。

本校の教育相談のしくみ



「特別支援教育」って ご存じですか？③



近藤文里先生（滋賀大）の講演から

この夏休み、特別支援教育について、近藤文里先生（滋賀大）の講演を聴きました。軽度発達障害の理解や、指導・子育ての手がかりをたくさん教えていただきました。今回はその紹介をさせていただきます。

■軽度発達障害が今や高校や大学でも問題

軽度発達障害についての講義をすると、その後必ずといっていいほど「私は先生の話のと通りの発達障害です」、「私の兄がそうなんです。」などと言ってくる学生がいます。講義の部屋が分からず遅刻してしまうという学生もいます。

■現代社会がADHD（注意欠陥／多動性障害）化への傾斜を高めている。

発達障害は昔からあったのですが、現代社会の急激な変化で増加傾向にあります。温暖化現象に例えると、水位が上昇してこれまで危険を感じなかった場まで危機にさらされるようになってきているようなものです。

■脳が行動を決めると言えるが、環境が脳を決めるとも言える。

脳は刺激によって発達します。刺激を遮断すると脳の発達は止まってしまいます。腕をカバーした状態で育てたチンパンジーに、カバーしておいた方の腕に熱ひばしをつけると、反対の手を引っ込めてしまう、という実験結果があります。

脳が行動を決めると言えますが、環境が脳を決めるとも言えるのです。虐待を受けた子もADHDとよく似た言動を取ります。

■軽度発達障害の共通部分は『注意』の障害

すべての軽度発達障害に共通なのは、『注意』の部分です。

ADHDで言えば『注意』の持続が難しい、ということです。

アスペルガーで言えば『注意』の選択が難しいのです。見なければいけないときに、それを見ないで他の方を見てしまう、といった具合です。

■周囲の対応によって、問題が大きくなってしまう。

本人は一生懸命やっているのに、失敗したり問題行動を起こしてしまうことがよくあります。そして叱られます。叱られると、「自分はだめなんだ」と自己評価が低下します。するとよけいに失敗や問題行動が増えてしまうという悪循環になります。

■「叱責」という形を変えることで変わる。

失敗をよくするY君という子がいたとします。「Y君、またこんなことしたの。だめじゃない！」と叱ってもY君の行動はあまり変わらないでしょう。

そうではなく、「Y君のいいところ、教えて」と学級の子どもたちに問いかけてみましょう。「やかん持ってきてくれた」、「机を運ぶのを手伝ってくれた。」などという声が返ってきます。「そうか、そういうことをすればいいのか。」と、評価された行動を繰り返すことで自信がつき、みんなの評価も高まっていきます。

■子どもの『つもり』を理解する。

子どもは訳もなく行動しているわけではありません。どんなに否定的な行動をするときでも、その子にはその子の『つもり』があるのです。そこが見えてくると、「叱責」でなく「共感」できるようになります。

■できるだけ具体的に言う

アスペルガーの子どもたちは、言葉の表面的な意味だけ理解してしまいます。

「ごみ、捨てといて」と言えば、そのへんにポイッと捨ててしまったりします。

そうではなく、「このごみを、あそこのゴミ箱に、捨てて」と具体的に言ってやればちゃんとできます。

■してほしくない行動には『温かい無視』……「どうしてほしいか」を伝える

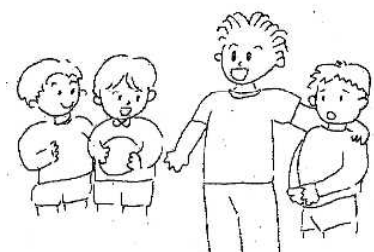
子どもがしてほしくない行動をしたとき、「やめなさい！」とすぐ叱りつけるのではなく、「またそのうち分かってくるだろう」と流して、「こんな場面では、こうしてほしいんだよ。」と正しい方法を伝えていくことです。

- ・注意するときは静かな口調で。感情をむき出しにしない。
- ・ほめるときは感動をこめてほめる。
- ・その子のものさしでほめる。

読んでいただければお分かりだと思いますが、特別支援教育というのは決して「特別な教育ではなく、どの子にも通じる、指導・子育ての原則なのです。

つまり、「特別支援教育は、みんなに優しい教育」といえます。

「特別支援教育」って ご存じですか？④



「博報賞」受賞について

平成15年度から取り組んできた本校の特別支援教育について、昨秋、県総合教育センターで報告させていただきました。それがきっかけで県が推薦してくださり、思いもかけず、このたび「博報賞」を受賞することとなりました。全国から3校選ばれたうちの1校ですから、とてつもなくすごい賞を受賞したわけです。

布小の受賞を聞いて、いろんな方が、「どんなすごいことをしたの？」と尋ねてくださいます。でも、私たちには正直言ってそんなに特別なことをやってきたという実感はありません。ただ、目の前の子どもたちと向き合って試行錯誤しながら精一杯やってきたというだけです。

そこで、今回はこの四年間の私たちの取り組みについて振り返ってみることにします。

□取り組みの始まり

本校が特別支援教育に取り組むきっかけは、県総合教育センターから「特別支援教育の支援体制について」の研究協力校を依頼されたことでした。そのときの私たちの正直

な思いは「大変だなあ」ということでした。日々の授業や行事の取り組みでいそがしいのに、それこそ「特別」なことを余分にしなければならない、と消極的な受け止め方でした。

□軽度発達障害の研修を重ねて

まず、教師自身の勉強から始まりました。「LD」「ADHD」という言葉ぐらいは知っているが具体的には何も知らないというのが私たちの実態でした。研究協力校ということで、県の方も積極的に支援してくださり、専門家の先生からいろんな研修を受けました。一番印象的な研修は「発達障害の疑似体験」でした。「見えているのに、それが何か識別できない」「騒音の中で相手の声を聞き分ける難しさ」「思うように鉛筆が動かせない」といったプログラムを実際に体験して、発達障害を有する子どもたちのしんどさが分かりました。

「外見からは、わがままや、根気がないように見えるが、実はその子も苦しんでいるのだ。」という新たな発見がありました。そして、「学校に行きにくい子」「よくトラブルを起こす子」「友達の中にうまく入れない子」たちを軽度発達障害の視点から見つめ直していきました。今まで「どうしてこんなことするんだろう」と原因がよくつかめなかった子について、新しい視点から見ると非常に納得がいくというケースがいくつも見えてきました。

□専門家との連携

身近に相談できる専門家がいることも大きな力になりました。学校でも気になるし、保護者の方も子育てで悩んでおられるというとき、「八日市南小学校通級指導教室」の小堀先生に『ひとまず相談』という形で助言をうけました。また月に一回訪問してくださる巡回相談員の川幅先生にも教室の子どもたちの様子を見ていただき、いろいろアドバイスを受けることができました。

こうして、最初は消極的だった私たちでしたが、研究協力校になってほんとうに良かったと思えるようになっていきました。

□指導の工夫

研修を重ねる中で本校の特別支援教育の柱となったのは「特別支援教育はみんなに優しい教育」ということでした。目や耳からの情報が受け取りにくい子どもたちにきちんと伝わるような指導、一般的な説明では理解が難しい子どもたちにもよく分かる具体的な指導を工夫することは、すべての子どもたちが学びやすくなるということです。

「特別支援教育は、その教室で行われている授業の質の追求なのです」という専門家の指摘を受け、私たちの日々の授業を見直すことに努力するようになりました。

元八日市南小校長の辻昭五先生に、私たち教師一人ひとりの授業を見ていただき指導

のあり方について助言を得る『授業研究』を年間延べ20回以上行ってきました。

□日々の記録

「こんな場面で、こういう指導をしたら、こうなった」という事実の記録を学級担任がするようになりました。そういう記録を積み重ねる中でより良い対応の形を見つけようとしてきました。「座席の位置を少し工夫することで落ち着けるようになった。」「『〇時までだよ。』と時間を指定するときちゃんと約束が守れた。」と言った子どもの事実を持ち寄り、校内研修会でみんなが共有するということも行ってきました。

これまでやってきたことは、このようなことでした。全国からいろんな実践が集まる中で布小の取り組みが選ばれた理由はこうした学校現場の具体的な取り組みにあったのかなと思っています。

先日、特別支援教育の研修会で講師の少徳先生がこんなふうに話されました。

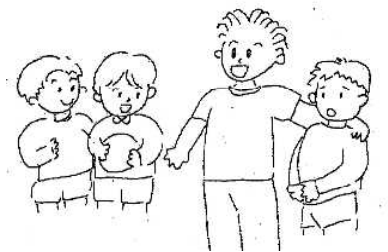
「特別支援教育は、決して『特別』な教育ではありません。どの子も分かる授業、一人ひとりが大事にされる学級作り、温かい生徒指導など、これまでも教師がやってきたこと、それを一生懸命やること、それがそのまま特別支援教育なのです。」

今回の受賞を励みにこれからも地道な取り組みを続けていきたいと思っています。

今、「もっと教師としての指導力をつけたい。」と、若い教師たちが自主的に勉強会も始めています。

「特別支援教育」って ご存じですか？⑤

子どもの育ちと「ゲーム」



先日来校された特別支援教育相談員の川幅先生が、子どもたちの遊びの中に浸透しているコンピュータゲームの怖さについて話されました。

「今の子どもたちの対人関係がうまく行かない大きな原因の一つに「ゲーム」があると僕は思っています。ゲームはいつでもリセットできる。うまくいかなければ、リセットしてまた一からやり直すことができる。いつでも自分中心で遊べるんですね。」

なるほど、昔の遊びのようにみんなが集まって何かをすれば、楽しいばかりではあり

ません。時には悔しい思い、悲しい思いをすることもあります。それもひっくるめて「人との関わり」の学びの場であったわけです。それが、すべて自分中心で、自分一人で遊ぶ。しかも何時間も。それが子どもにとっていいはずはないですね。

「ぼくは、低学年ぐらいまではゲームを禁止にしたらどうかと思います。」とも言われました。

川幅先生の話聞いて、「ゲーム脳」という言葉を思い出しました。「ゲーム脳」とは、コンピュータゲームをしている子どもの脳の状態を言います。コンピュータゲームをやっている子どもの脳波を調べたら痴呆状態の脳波と同じだったということから、マスコミでも大きな話題になりました。しかし、その後専門家から否定的な意見も出て、今はあまり言われなくなりました。

ただ、子どもたちが集まっても、一人ひとりが無言でゲームしているだけ、という景色は子どもの健全な育ちではないだろうということは確かです。

でも、コンピュータゲームの害は分かっているけど、保護者としては、（まわりの子どもたちがみんなゲームで遊んでいるのにうちの子だけゲームさせなかったら友達の中に入れないのでは）という不安をもたれるのも正直なところではないでしょうか。

とすれば、できることは、時間の区切りをつけて上手にゲームとつきあえる子にする方が現実的かもしれません。しかし実際は延々と寝るまでゲームをやっているという子も少なくないような気がします。

「時間の区切りをつけずいつまでもゲームをやめない子どもに、どう対処すればいいんでしょう。」

という悩みをお持ちの保護者の方、こんな方法を試してみたいかでしょうか。

（カウンセラー井上知子先生の講演から）

お母さんは（ゲームを）買ったかったんですか？買いたくなかったんですね。ですから、最初の時点でこれは親は買いたくなかったんだということをはっきり伝える。「子どもを受け止める」＝「子どもの言うことに従いなさい」ということではありません。親は親の考えをきちんと持っていてください。反対だけれども買うということになると、ほしい人と買いたくない人がいるわけですから、どこが折り合い点か話し合う必要があるわけですね。その話し合いを今からでもしきりなお的にされることをお勧めします。「おかあさんはずっと使ってほしくない。あなたは使いたい。どうしましょう。」とやるべきなんですね。「じゃどれぐらいだったらいいの？」「まあ、1時間ぐらいかな？」と。ある程度数字で分かるような約束の方がお互いに分かりやすいのでね。その目安を決めること。ポイントは次なんですね。約束をして、じゃ、子どもは守るか？たぶん10日目ぐらいから崩れ始めますね。そのとき「約束したでしょう、やめなさい。」これは **you** メッセージなんですね。多くの親は「子どもに守らせる約束」だと思っているんですね。これは「あなたと私が守る約束」なんです。子どもに守らせようとしているかぎりだめです。守る親がいる

かぎり o k なんです。「1時間以上やってたらお母さん1週間預かるわね。1週間たったらまた返してあげるからね。」そこまでの約束をしておくことです。そして、1時間以上やっていたら「預かるわね。約束だったでしょ。」と取り上げてください。理由をくどくど言わない。お母さんの側がきちっと約束を守ればお子さんはゆっくりわかっていきます。

これは、宿題とか朝起きも同じ事です。おはしの場合、「お母さんはこんなふうを持ってほしいと思ってるわ」くらい。自分の側の気持ちを言う方が、一見遅いように書いてよく伝わる可能性は高いです。

※youメッセージ

youで始まる文章のこと。「あなたのせいでこうなったのよ」「あなたがこれをしたから……」と相手を責める言葉なんです。

例えば、不登校のお子さんが出たときに父親が母親に「おまえの育て方が悪いからこうなったんだ。」という。これ、ものすごい責め言葉なんですね。

youメッセージというのは「あなた」が入っていない場合もある。「早く、早く。」「さっきから言ってるでしょ。」主語がないけれど、英語の命令形youがとんでしまっただけで本来あるのです。

youメッセージというのは決定的に人の関係を壊していってしまいます。親子のところで起きると子どもはしんどいです。